

1日1ページ、1年365ページ
～ 熱心にコツコツ続ける力が運を引き寄せる ～

琉球大学の附属図書館長である成富研二先生に、研究者や附属図書館長としてのご経験についてお話をうかがいます。



琉球大学
附属図書館長
成富研二先生

研究者として

成富先生のご研究分野について簡単に教えてください（一般の人にもわかるように平易にお願いいたします）。

まず最初に申し上げておきたいのですが、僕はもともと小児科医です。医学研究者と医師というのはまったく違うものです。今は医学研究者ですが、最初から基礎医学をやっていたのではありません。臨床に携わりながら、基礎医学の研究も行っていました。10年ほど前に小児科医をやめて遺伝医学の研究を専門にするようになりました。かなり特異な経歴だと思います。

僕の専門は、遺伝子からむ人の病気の研究です。臨床遺伝学といったり、医科遺伝学または遺伝医学といわれるものです。病気から遺伝子まで全てを扱います。普通の基礎医学者は、遺伝子の働きなどの研究が中心になると思いますが、僕は、ある病気があったら、どうい遺伝子が原因でその病気になるのかを患者さんを診ながら診断する研究をしています。今は患者さんを診ていないので、これまで診た患者さんの細胞をみるか、あるいは今はコンソーシアムといって全国でグループを作っていますので、そこから症状が同じ患者さんの細胞を送ってもらって判断するわけです。僕は今まで診た患者さんの細胞をたくさん持っていますので、そういったリクエストが来たら、その先生に細胞を送ります。

細胞はどのような状態で持っていていらっしゃるのでしょうか。

たとえば、あなたが癌になって3年後に亡くなられたとします。あなたの死と同時にあなたの細胞は消えてしまいます。ですので、癌と分かったときに、あなたの血液をもらって、血液の細胞を処理します。処理した細胞を液体窒素の中で凍結保存します。そうすると、あなたが亡くなられてもその細胞は永久に残ります。遺伝子を調べる時は、フレッシュな細胞が一番良いのです。だから、以前は、ある特定の病気の患者さんが100人必要だとなったとき、一人ずつもらいにまわったので、100人の細胞を集めるのはなかなか難しかった。大変な時代だったのですよ。ところが今は、株化細胞というテクニックが完成しています。1回診た患者さんには、インフォームドコンセントをもらって、承認を書いてもらって、細胞をタンクに保存するのです。これで自分が必要な分だけ細胞を増やすことができます。

僕がやっている仕事は責任遺伝子を発見するところまでです。遺伝子を発見した次の段階は、本格的な分子生物学、バイオサイエンスの領域になってきます。その分野では、ある程度の人と設備が要るのです。余程おもしろい遺伝子であれば、みんなが寄ってきますけれど、それほどおもしろくない遺伝子であれば、自分たちで研究を進めるしかない。世の中の病気の中で原因が分かっているのは、10～20%くらいのもので。ほとんどの病気の原因はまだ分かっていないのですよ。すべてが分かったようなマスコミの報道は嘘も多いのです。神様の知恵がそんな簡単に分かるわけがないでしょう？研究というものは、何かが分かると、またその次の分野が開けてくるのです。お釈迦様の手の中で遊ばされているようなものです。

昔はコツコツ研究を積み重ねていくしかありませんでしたが、今は大規模な遺伝子データベースがあって、一度に大量の処理ができます。次世代シーケンサーは全国にまだ7台しかありませんが、そのうちの3台は沖縄にあります。ですから、うちの准教授はその分野で日本のトップを走っていますよ。でも今後は、旧帝大をはじめ、多くの大学に導入されるでしょう。

遺伝性疾患診断用ソフトウェアを開発し、全国に向けて公開されているとのことですが、どのように使われているのでしょうか。また、こうしたソフトウェアを公開された経緯を教えてください。

データベースを作ったのは臨床遺伝学のためです。まず一番大事なことは診断をつけることですが、風邪などではなく、ものすごく難しい病気ですと、ほとんどの医者は診断をつけられないのです。ある病気の診断をつけるためには、まず基本となる有名成書を見るわけですが、本は文献情報を書いているだけで、まとめしか載っていないじゃないですか。それで僕がしたのは、全世界の有名な教科書を全部読んで、全部の遺伝性疾患をまとめて、その症状データを統合させたのです。そしてそれをデータベースとして診断に使っていました。しかし検索してみると、たくさんヒットし過ぎて、何が何だか分からないのです。ですから、教科書レベルではない難しい文献をたくさん読んで、症状を詳しく入力しました。そして、患者さんの症状を入れて検索すると、可能性のある病気のリストが可能性の高い順序で出るように作ったのです。同様のデータベースは既にオーストラリアにあったのですが、値段が高すぎますし、日本のコンピューターでは動かなかったのです。OSが英語じゃなければ動かないので、コンピューターごと買う必要がありました。そのコンピューターは日本製だったので笑いましたが、日本の機械を使って、他の国がお金を儲けているのです。情報を持っている方が強いということですね。日本と欧米の差は、情報の差じゃないでしょうか。だから購入するお金がなかった僕は悔しくなって、同じようなものを自分で作ってやろう、と思ったわけです。



ので裏庭で一年中青野菜が採れますからね。

全国に向けて公開されているということですが、

専門家にDVDで配布しています。患者さんが来ると、僕はデータベースとソフトウェアで診断をしますが、最終的には文献の確認が必要なのです。さらに、その病気に対して遺伝子診断ができるかどうか、どういう遺伝子異常が報告されているかということまで、全部見られます。しかし、ほとんどのお医者さんは、遺伝子診断を自分ではできません。以前は、遺伝子診断を引き受けていましたが、やめました。研究に支障をきたすのでもう再開する気はありません。

それはなぜですか。

こちらはお金と時間をかけてやっているのに、依頼してくる医者への態度に憤慨したからです。僕も医者だったからよくわかりますが、平然と「まだ？」と催促してくるのです。だいたい遺伝子一つ診断するために、数日は確保しなければいけません。遺伝子に異常があることを証明するのは大変なのです。人間の遺伝子は多様ですから、1つDNA配列が違っていても、それが悪いことをしているかどうかはわからないのです。父と母と子と3つ調べて、それを一般集団と比較します。

最近、特定の病気になる可能性を調べて、糖尿病やメタボになりやすいとか言っていますが、あれはみんな言い過ぎです。あなたは糖尿病になる確率は18パーセントと言われて、どうするのですか。不安になるだけじゃないですか。ほとんど統計のマジックで厳密にいうとインチキなのです。そういうことを啓蒙して、医療費を減らすために始まった制度です。ところが検査して18パーセントと言われて注意できますか。どうやって注意していいかわからないでしょう。だから、検査代だけかかってほとんど効果はゼロ、というのが僕の意見です。僕はもともと小児科ですから、そんなお金があったら子供の医療費をタダにしろと言いたいです。子供を大切にしない国は滅んでしましますよ。お世話になったという思いのない子供は年金を払いませぬ。このままでは年金は崩壊してしまうでしょう。今、年金生活している人が一番楽です。僕らが払いに払っているのですから。僕が今ちょうど60歳ですが、この先はひどいことになるだろうと思います。

データベースを公開しているのは、大勢にも利用されれば、子供の医療も改善していくとお考えだからでしょうか。

いいえ。そういう大きな考えが最初はあったけれども、今はありません。最初はそのようないいなと思ったけれども、保険点数がつかない遺伝子医療というのは、売上が伸びないので、結局サービス残業になります。そうすると、病院のお荷物と言われてしまいます。同様に、最初に産婦人科が駄目になることは分かっていました。理由は一番訴えられるからです。お産は全部正常と勘違いしている方が多いですが、受精卵の1/2は死ぬのですよ。だから受精するだけで、手を叩いて喜ばなければいけないのが本当なのです。生まれてくるということは大変なことなのに、出産に問題があると、産婦人科の医者が責められます。

少子化の問題も、遺伝の病気という僕の苦しんでいるところも、みんな老人医療という一点に集約されると思っています。理由は一つ、長生きしすぎるのです。自分がこれから老人になろうとしているので、あまり言いたくはないです。だから、働ける老人になろうと思っています。年金で遊ぼうとは思っていません。

日本人は何故こんなに長寿になったのでしょうか。

一番は食事でしょう。粗食です。カロリーを摂りすぎた人は長生きできません。バターを摂りすぎた人は大腸系の病気になりますし、年をとったら癌になります。また、塩分は良くありません。沖縄の長寿の一番の原因は塩分が低いことと、緑黄色野菜ですね。沖縄では暖かい

研究者になって良かった、と感じられるのはどんなときでしょうか。エピソードがあれば教えてください。

臨床医のときは毎日良かったです。人とのつきあいばかりですから、泣いたり笑ったりで、ものすごく楽しかったです。研究者になったらなかなか面白いことがないです。研究というのは、なかなかうまくいかないのです。そのときに、相手が人じゃないから一緒に酒を飲むわけにもいかない。良かったと思うときは、すごい雑誌に載ったときと本が出版されたときぐらいじゃないでしょうか。

研究者はつらい、と感じられるときはありますか。

研究者がつらいと感じるときはしょっちゅうです。僕はデータベースをずっと作っているので、睡眠時間が毎日4時間半です。もう20年になりますが、さすがに最近つらいです。特に夏がつらいですね。今、ドリンク剤を飲んでます。コンピューター作業だから、目・肩・腰にくるのです。

睡眠時間がそれだけ短い生活をずっと続けられていて、それでもデータベースの作成を続けようと思われるパワーの源は何でしょうか。

僕しかいないからです。僕が辞めると、日本では誰もいないのです。だって、臨床系で使えるのは世界で2つしかないのです。オーストラリアに1つあって、日本では僕のところにしかないのです。使命感というか、勝手にそう思い込むわけです。

あと、新しいもの好きなのです。だから、データベースに入れていない新しい情報があると気分が悪いのです。新しいもの好き遺伝子というものがあるのですよ。例えば新しい電話が出たらすぐ買う人がいるでしょう。あれは新しいもの好き遺伝子を持っているからです。僕はその遺伝子を持っています。だから、iPhoneが出たらすぐに買いました。マックも常に最先端の機種を揃えています。



研究者としてスランプを感じられたことはございますか。あったとすれば、どのように対応されておりましたか。後進者のために教えてください。

スランプというより、僕らの研究では、実験に関する色々なものが音を立てて変わるのです。僕が研究を始めた頃は、染色体の分析さえしておけばどうにかなったのです。でも染色体で研究していたら、途中

から遺伝子のおかげで、そのために僕は留学したのです。

研究に必要な機械が変わるのも大変です。新しい機械に変わると、それまで自分がプロみたいな顔をしていたのが、旧式になってしまうのです。それが一番つらいです。また勉強し直さなければいけません。また、新しい機械の導入には数百万から一千万の費用がかかります。だから、そのお金をどこからひねり出すかということを日夜考えざるを得ないです。機械がないと研究も先に進めませんから。ですから、困ったときにお互いに協力し合える関係を構築するために、日頃の学会の付き合いが大切になるわけです。研究者としての付き合いです。そうやって今まで何とかなってきました。

お金を集めてくる能力は何でしょうか。

簡単に言うて運です。ラッキーとアンラッキーです。あとは、小出しでも良いから何かを熱心にやり続けることです。とにかく一所懸命やっている姿勢が評価されるのだと思います。誰も認めてくれないとほやいても、どうにもなりません。僕は10年前に小児科を辞めて教授になったとき、まったくどうしていいかわかりませんでした。でもコツコツと出来ることを頑張っていました。そうしたら他から声がかかって、研究資金を得ることができました。とにかく、ふてくされないことです。ふてくされたくないようなことがあれば、酒を飲んで忘れ

座右の銘をお持ちであれば、教えてください。

「1日1ページ」です。そして「1年365ページ」。一日も休まずに続けるということです。僕はデータを作っているからデータを毎日入れるのです。その次は「継続は力なり」。そして「成富日新堂」です。僕の実家は薬局で「成富日進堂」と書きます。僕はそれを日に進むではなくて、日に新しいに替えました。おやじは日に進むで、僕は日に新しいです。僕の字（あざな）は日新堂です。自分で作りました。（島津日新斎がヒントです。）

例えば飲みに行ったらかなり疲れて帰ってきたときでも休まないということでしょうか。

若いときは、飲みに行ったら1時間勉強して寝ました。ライバルを思い浮かべて、「たぶんあいつは酒を飲んで良い気持ちで寝ているだろう」と思って勉強して、「1日1時間勝った」と思っていました。

ライバルの存在は大きいんですね。

僕は、2年ほど病気で入院したので遅れてしまい、僕より年下の方が上の学年だったのです。そうしたら、僕が先輩なのに偉そうなことを言った人がいたのです。それでカチンときたというわけです。



「1日1ページ」は、学生の皆さんにも教えていらっしゃいます

か。

僕の最初の講義では、僕の生い立ちを話します。生まれたときから今まで、ずっと話します。なぜ医者になろうと思ったかといった話だけでなく、なぜ日本は戦争に負けたかとか、実は沖縄で何人死んだかとかも話します。2年生に教えています。彼らは医者になる心構えといったものが本当に希薄なので、こういう話が必要だと思うのです。

アメリカに留学された経験もおありだそうですが。

文部省のプログラムで、10カ月アメリカに行きました。当時はなんでも10%予算をカットする時代だったので、1年は10%予算カットで10カ月というわけです。支給額も10%カットです。

留学先では、色々な目に遭いました。あまり楽しい思い出はなかったですね。僕は、ちゃんと英語を話せたので、最初から差別を味わいませんでした。何も知らない方が良かったかもしれないと思います。僕は、ちょっと日本人と思われなかった可能性があります。だからそういう目に遭ったのかもしれませんが、よくスペイン語で話しかけられました。僕が留学した先は日本人の先生だったので、まわりは日本人ばかりでしたから、英語を話さないとすれば、話さなくても済みました。けれども、色々なところで最初からどどん飛び込んで行って、色々な経験をしました。ドライブスルーでケンタッキーを買いに行ったら、「Crispy or original?」とか聞かれるわけです。クリスピーが日本になかったの何だかわかりませんでした。今だったら分かるでしょうけど。「No thank you.」と言ったら笑われました。家に帰って辞書を引いてわかりましたが。あと、車を買ったときは、自分と家内の分で2台買ったのですが、1台は現金で、もう1台は仕方なくクレジットカードで買ったのです。そうしたら大量の書類にサインさせられました。それも同じものを2回書くのです。その後しばらくしてからVISAから電話が来て、クレジットカードが利用可能金額の限度を超えていると怒られました。

特に影響を受けられた恩師はいらっしゃいますか。どのような思い出がありますか。

鹿児島大学小児科の寺脇保教授です。寺脇研さんを知っていますか？文部科学省の寺脇研、ゆとり教育の宣伝マンは寺脇教授の息子です。鹿児島にいたとき、寺脇先生に沖縄に行けと言われてました。

なぜ沖縄だったのでしょうか。

琉球大学で医学部を開設するときに、鹿児島大学の講師だった先生が琉球大学の教授になりました。その頃、新しい大学には教授と助教授とペアで応募しなければならず先輩が助教授になりました。ところが、その助教授のお父さんが脳溢血で倒れられて、実家の病院を継ぐことになったのです。これは大学院を作ろうとしていた琉球大学医学部の緊急問題になって、どうしてもすぐに助教授になれる人が必要という話になりました。学位を持っている人で、ある程度助教授になれるような人、ということで僕になったのです。

でも実は、すんなり決まったわけではありませんでした。一番最初に琉球大学に行かないかと誘われたのは僕でした。「良いのかな、こんな早くして助教授になって」などと思いつつ、行くつもりでいたら、1年ぐらい経ったら「もう行かなくていい」と言われました。それでも全然行くつもりはなかったのです。そうしたら、しばらくしたらまた呼ばれて、行くはずだった人が駄目になって、その次に行くはずだった人が嫌がって、だから僕のところに話がきたと言うのです。「今頃また行けとは何事ですか」と言って食ってかかりましたよ。もう辞表を出して辞める覚悟でした。家内にも「辞めていいか」と聞きました。そして「今日は一人で飲みに行ってくる」と言って、お酒を一人で飲んでいたら、琉大の教授が飲み屋まで訪ねてみえたのです。琉球大学の医学部長からも別のきかいに「ぜひ来てくれ」と直接頼まれて、そ

れで決心しました。人生には色々あります。しょぼくしたら終わってしまいます。

最近の若手研究者に対しては、どのような印象をお持ちですか。

要領が良いです。頭が良いのか悪いのか、分かりません。だけど要領は良いです。生きるための知恵が発達していると言った方が良いのかもしれませんが。もがかないのですね。もうちょっともがけばいいのに、要領良くやるか、諦めるかのどちらかです。大抵の人は要領が良いけれども、仲間に入っていけない学生が1割くらいいます。あれは勉強ばかりしていたのですかね。会話ができません。そうすると仲間ができません、だんだん孤独に入っていきます。それでも勉強ができればそのまま上がっていくのでしょうけれども、1回でも引っ掛かったときに他の人から情報を取れないのです。そうすると、学校に来なくなります。要領が良いので、条件の良いところだったら能力を発揮するかもしれないけれども、ちょっと条件が悪くなったときにはいけません。

研究者を取り巻く環境は、ここ30年間くらいでどのように変わってきていると思われますか。

一番の変化は機械の高騰です。1台の機械が何十万もするものばかりです。一般的に大学からもらう研究費がどれくらいか知っていますか。何も買えない金額ですよ。僕はもう、あまりの少なさに目が飛び出るくらいです。だから、研究費を自分で取れるような人を教授にしようとするのです。

それから、研究のスタイルが個人研究からコンソーシアム研究に変わりました。コンソーシアムを組まなければ研究をやっていけないというか、認められない、予算がつかないのです。コンソーシアム研究では、助かっている面もあります。研究成果を論文で発表するとき、関わった全員の名前を入れるのです。1人で研究すると、書ける論文の数は限られていますから。だから逆に言うと、評価なんてあてになりませんよ。教授を採用するとき、ものすごい数の論文のある候補者にはその研究を説明してもらいます。名前だけ載っているのでは説明できません。そうすると、その論文に名前が載っていることは意味がないのです。だって、この大学に来て同じ研究をやってもらうことはできないのですから。

最近では研究者の評価の一部として客観的数値が用いられることが増えてきています。そのことに関してご意見をお聞かせください。

これは良いところと悪いところがあるでしょう。インパクトファクターは客観的指標として僕も良いと思いますよ。良いと思いますけれども、インパクトファクターで選ぶと、いくつかの講座の教授がみんな同じ分野の専門家になるのです。結局インパクトファクターは、研究者の数も影響するものですから。The New England Journal of Medicineはインパクトファクターが非常に高いですが、毎週発行される雑誌で、しかも臨床じゃないですか。週刊の雑誌に載った記事を基礎医学ではそれほど高く評価できません。ちゃんとした学会誌クラスの雑誌でないと評価できないと思います。

ただ、インパクトファクターが高い雑誌に多く載っている人の方が研究費もたくさん取っている傾向があるので、変だなとは思いますが、仕方がないとしか言えません。インパクトファクターが高い雑誌に多く載っている人の方が元気があります。インパクトファクターが高い雑誌にあまり載っていない人は、なんとなくションポリしています。やはり、インパクトファクターが高い雑誌に載ったということは自信になるのかもしれませんがね。

僕は、Nature Geneticsに5回やりとりして最終的に落ちたとき、

尊敬するアメリカの先生から「ノーベル賞を取った論文は、ほとんどNatureとScienceには載っていない」と慰められました。今も一本戦っていますよ。僕も共同研究者になっている論文です。東南アジアのコンソーシアム研究で、東南アジアの人類はどこから来たのかというテーマの論文で、Scienceで掲載されるぎりぎりまでいって結局駄目になってしまったのです。(後日談；再考再投稿論文がとありました。)

おもしろそうな研究テーマですね。

しかし注意が必要です。人種差別になってしまう危険性がありますから。

成富先生は佐賀のご出身とのことですが、沖縄に赴任されたときの経緯や思い出などを教えてください。

実は、恩師の寺脇先生と会ったのは、私が留年したからなのです。留年しなければ、寺脇先生のところにも行かなかったはず。大学6年生のときに、麻酔科の教授とケンカしたのです。「おまえには絶対単位はやらない」と言われて、卒業が延期になったのです。今は駄目でしょうけれど、昔はそういうことがありました。それで困って、知っている先生は寺脇先生だけだったので電話したら、「うちの医局に1年勉強しに来るか」と言ってくださいました。午前中は外来に出て、午後はすることがないから、国家試験の勉強をしたり、実験を手伝ったり。夜は帰っても仕方ないので、当直室の二段ベッドにいて、急患が来たら起こされてお手伝いしました。だから学生のときから半分くらい臨床をやっていました。楽しかったですね。寺脇先生は怖かったのですが、他の医局の先生たちにもすごく良くしてもらいました。僕は、外科に行きたいなと思っていましたが、小児科を手伝っていたら門前の小僧で鍛えられたわけ。採血でも相手が子供だと難しいでしょう。上手になったら人に教えたくなるでしょう。それで、研修医の指導をしていました。同級生が研修で回ってくるのです。おもしろかったです。

寺脇先生の字(あざな)は「南風」で、先生は常に「風は南から」と言っておられました。鹿児島は先端だから南を見なさい、と。だから沖縄に行くことになっても抵抗感が全然ないわけです。



東京や大阪などの大都市ではない場所にある大学に所属すること

のメリットやデメリットはありますか。

それほど違いがあるとは思っていませんが、研究者として沖縄のデメリットといえば、色々な説明会や勉強会に遠すぎて行けないことでしょうか。東京あたりの人は、色々なところに行くことができますよね。大都市では、それがメリットだと言えるかもしれません。けれども、そういうものに参加すると時間を食いますよね。それに振り回されて、本来の自分の研究に使うべき時間が取られてしまいがちではないでしょうか。僕はそういうことができませんが、逆に言うと、だからこそ僕はずっとデータベースを続けられたのです。デメリットがあったら、それをメリットに変えるように考えればいいだけの話です。最近はメールやインターネットがありますから、本当に必要な情報は手に入れることができます。

沖縄出身の学生さんたちが大学を選ぶ場合、敢えて都会の大学に行くことはよくありますか。

僕は医学部のことしか分かりませんが、なるべく沖縄から出ずに医者になれば、本人も親戚も万々歳でしょう。ですから、琉球大学を目指す沖縄出身の学生は多いと思います。他の県の大学の医学部に行ってしまうと、その大学病院には残れても、沖縄の大学病院に戻ってくるのが難しいからです。

琉球大学憲章には、「琉球大学は、基盤研究の重要性を認識した上で、特色ある自然・文化・歴史を有する琉球列島の地域特性を活かした研究を多様な視点から展開し、世界水準の個性的な研究拠点たることを目指す」とありますが、成富先生のご研究で特に地域特性が活かされている点を挙げるとすれば何でしょうか。

僕は、まず沖縄の患者さんで、その病気の原因になっている遺伝子を見つけて、それが世界とどう違うかを調べます。沖縄の地域特性というと、僕が沖縄にいることが地域特性になります。また、僕のデータベースは日本全体に公開していますから、これは沖縄発と言えると思います。

沖縄の地域特性と言われると、沖縄に特殊な病気があるかということになるかもしれませんが、確かにいくつかありますが少ないですよ。珍しい病気はいっぱい見つけていますが、沖縄だけという病気はあまりないのです。僕が何かを見つけて発表すると、必ずしばらくして中近東あたりで似たものが発見されます。そうするともう沖縄だけではなくになります。病気というのはそんなものです。

附属図書館長として

2008年11月から図書館長を勤められていらっしゃいますが、図書館長はどのようにして選出されるのでしょうか。

学長の推薦のようです。各学部で2年で回すおおよそなルールみたいなものがあるようです。あとは、次が何学部というのが分かっていると、その学部長が学長に推薦するのです。たまたま今は、学長が元医学部ですが、今の学長が医学部長のときにも僕を推薦していたのです。

学長から電話を受けて図書館長だと言われたときは、「嫌です」と言いました。だってキャンパスが違うので、医学部から図書館まで来るのは大変ですから。でも、「君はデータベースが得意だから」と説得されました。今の時代、データベースとか、そういうものを分かっている人の方がいいのじゃないでしょうか。

就任されたときは、どのようなお気持ちでしたか。

ピンとこないわけです。学長とは10年来の知り合いですから、断れなかったのです。自分の講義や研究の一部を准教授に押しつけることになるので、それで大丈夫かどうかは気になりましたが、今はうまく

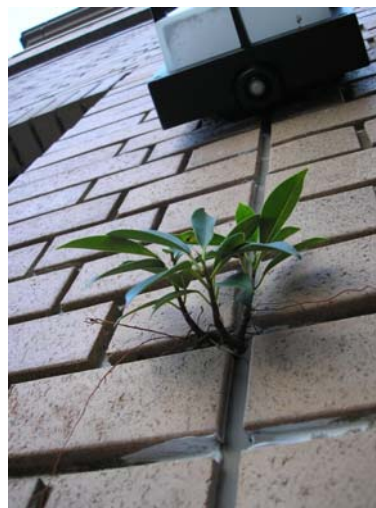
いっています。

図書館長になって良かったと感じることはありますか。

琉球大学全体が分かったことです。今までは医学部のことしか知らなかったけれども、一応図書館で部局長ですから、色々な会議に出るでしょう。それで琉球大学全体のことがかかり理解できるようになりました。それが一番感じることでですね。そうすると、学長にも意見を言えます。お金が必要となれば直談判しに行きます。前より聞いてくれます。学長も僕が行くのはウェルカムですよ。もっと来いと言われるけれども、離れているので移動が大変です。

学外からでも学内でも、お金を持ってくるのはすごいですね。

僕が持ってくるのではないのです。そういう計画があるところに呼び寄せられているのです。何か縁があるのでしょう。縁があると思っていただろうが良いですね。そうすると本当に縁が来ます。来ないのは宝くじだけです。僕は鹿児島にいて、6,000万円の一番最後の数字だけが違っています。もう、本当に悔しかったですね。10の桁まで合っていたので、心臓が飛び出そうになりましたが、はずれでした。



一番苦労されていることは何ですか。

予算を前年度並みに継続させることです。それで、しょっちゅう学長にアピールしているわけです。基盤整備が大事だと言っています。だいたい今は1%か5%カットです。けど、それをなんとか維持することです。前の図書館長が頑張ってくれたおかげで共通経費になっているので、本当に楽に流れています。共通経費じゃなかったらと考えたらぞっとしますね。

アイデアはいっぱいあります。でも事務方の皆さんとうまく連携しなければいけません。ですから、彼らの表情を良く見るようにしています。つまらなさそうな顔をしているときは、なにかあるはずなんです。そういう時には声をかけるようにしています。そうすると、大抵なにかあります。ただ、アイデアがあるのもよし悪しで、事務の皆さんに迷惑がられているかもしれません。仕事が増えると言っています。

図書館長に就任してから、発見した(気付いた)ことはどのようなことでしょうか。

最初にびっくりしたことは、佐賀と沖縄のつながりの深さと自分との縁です。図書館で古い資料を展示してあったのですが、その中に鍋島直彬(なべしまなおよし)の事務官である原忠順の書簡がありました。

鍋島は、肥前鹿島藩の最後の藩主だった人で、生まれは佐賀でした。明治時代には沖縄県令(知事)になっています。それから、西表島の炭坑の写真がありました。西表島に炭坑があったことは知っていましたが、佐賀からそこに移民が炭鉱夫として行っていたのです。佐賀には昔、炭坑がたくさんありましたから。僕が西表島にある炭坑の存在を知っていたのは、新婚旅行で西表島に行ったからです。不思議な縁があるのです。今思うと、なぜ沖縄に新婚旅行に来たのかなと思いますね。あんまり言うと、神秘的な話になるから、あまり言いたくないけれども、なんでも真摯に受け止めて頑張っていると、良い結果が出るときもあれば、悪い結果が出るときもあって、それがほとんどプラスマイナスゼロで終わるはずだから、人生の前半が悪かった人は、後半は良くなるだろうと思っておけばいいですよ。僕は、前半は色々な目に遭ったので、図書館長になるときも、これからいよいよ良くなると思いました。図書館の事務の皆さんも、館長がラッキーおじさんだから困ったときにでもどうにかなると思っておけばいいのです。予算カットなどで苦しいと思いますが、ラッキーおじさんがいると思えば良いのではないのでしょうか

電子化などに伴い、図書館の役割が変わりつつありますが、図書館と研究者の両方の立場を知っている成富先生にとって、「理想の図書館」とはどんな図書館だと思われますか。

僕は完璧な電子図書館だと思います。本だけではなくて何でも電子化するので。例えば、琉球大学の規則集とかも全部電子化すれば良いと思います。なんでもオープンにしましょう、と。

電子ジャーナルについては、国で買って欲しいです。いちいち大学に無駄な苦勞をさせるなど言いたいです。国が一括管理すれば良いじゃないですか。僕は、少なくともバックファイルは国が一括管理するべきであると、やかましく言おうと思っています。最新の論文だけ見て、何ができますか。

琉球大学附属図書館のご自慢を教えてください。

湯川秀樹さんの直筆の書です。自慢です。昔、琉球大学に来られたときに書いてもらったそうです。



琉球大学憲章には、「平和への貢献」が記載されています。附属図書館でも、「平和への貢献」のための取り組みが行われていれば教えてください。

普通、沖縄で平和という戦争が重要なのですね。だから、基地資料とかそういうものになるかと思いますが、大学にはそういう資料は基本的に置かないのです。戦争資料は、県立の公文書館にあります。公文書館には、戦争の前後あたりからの資料や、米軍が撮影したフィル

ムとか地図がいっぱいあります。年に1回ここへ公文書館からそういった資料を持ってきて展示します。映像も見せられます。前回の展示では、1本が30分のもの2本をプロジェクターで見せました。1つが終戦直後の沖縄の風景で、アメリカ人が撮ったフィルム、もう一つは過激だったのですが、アメリカ軍が編集した実戦沖縄戦でした。途中で気分が悪くなるような感じでした。アメリカ軍の従軍のカメラマンが撮ったものです。米軍が撮った航空写真で作った地図もありました。これは沖縄戦に入るときに、沖縄のものすごく上空から撮った航空写真です。それで地図を作って爆撃を行うわけです。あとは、もうほとんど勝ちそうになって日本の反撃がなくなったときにかなり低空で撮ったもので、それから詳細な地図を作っています。とても大きな地図です。それを床に敷いて、そのの上へ上がって見られるように展示しました。ビニールで特殊加工してあるから大丈夫です。

日本で一番最初に行われた裁判員制度は沖縄だったのですが、琉大にはそのときの記録が残っています。最近裁判員制度が始まった関係で、NHKとか色々なところにそのときの資料を貸し出しました。僕も許可の判子をたくさん押しました。

最後に

今後はどのような展望をお持ちでしょうか。抱負をお聞かせください。

僕は医学部分館をどうにかしたいですね。スペースが足りないのです。この図書館をそのまま医学部に持っていきたいです。図書館自体をラーニング commons のようなスペースとして設計していないので、どうにかならないかなと思案しています。図書館長としての任期は2年ですが、一番怖いのが為替レートの逆襲ですね。そのときは、どうにかしなければいけないですね。

研究者としては、定年後も働かなければいけないでしょう。もう睡眠4時間半の生活を20年以上続けているので、辞めてしまうと、たぶんどうしていいかわからなくなります。おかしくなるのではないかと思います。生活パターンがきちんと決まっているのです。それに、新しいもの好きですから。新しいものを買おうと思うと、年金では買えないです。ですから今後もコツコツと続けていこうと思います。

成富先生、どうもありがとうございました。



(左から右) エルゼビア・ジャパン(株) 恒吉有紀、梶田次郎、琉球大学 成富研二教授、インタビュー：エルゼビア・ジャパン(株) 柿田佳子